歩楽歩楽マップその2
ヤタガラスの弥之助(やのすけ)の南谷墓地案内

ヤタガラスの弥之助(やのすけ)

①中村(旧大前)俊子(としこ)
②沖見嶽浪之助(おきみだけなみのすけ)
③丙寅戦死者の碑(へいいんせんししゃひ)
④峰尾節堂(みねおせつどう)
⑤坪井蜂音庵(つぼいぶあん)
⑥尾崎真龍(おざきしんりゅう)
⑦湯川麗洞(ゆかわげいどう)
⑧須川政太郎・カタ(すがわまさたろう)
⑨大石誠之助(おおいしせいのすけ)
⑩和貝彦太郎(わがいひこたろう)
⑪奥栄一(おくえいいち)
⑫永田衡吉(ながたこうきち)
⑬高木顕明(たかぎけんみょう)
⑭下村悦夫(しもむらえつお)
⑮中上健次(なかがみけんじ)
⑯川上不白(かわかみふはく)

新宮市立図書館
「新宮文化人案内図」
その2
新宮市井の沢4番15号
0735-22-2284
2012.5

階段
徒歩
P 駐車場
WC お手洗

弥之助の南谷墓地案内

①中村(旧 大前)俊子

佐藤春夫の初恋の人。『わんぱく時代』や詩『少年の日』に、主人公の憧れの女性として登場するモデルです。(詳しくは『わんぱく時代』『殉情詩集』で)

②沖見嶽浪之助

幕末の最後の新宮藩主水野忠幹(ただもと)の抱え力士で、大阪大相撲の小結まで昇進しました。常に殿様の馬の口取りを勤めた身長六尺(約180cm)の大男で、明治維新後もちょん髷をして新宮の名物男でした。(詳しくは『新宮あれこれ』で)

③丙寅戦死者の碑

1865(慶応元)年、第二次長州戦役の際、総大将紀州藩主徳川茂承(しげもち)の下、新宮城主水野忠幹を後軍の大将として水野家の武士が参戦、広島県で戦いました。戦役後、戦死者12名をしのび、碑を建立しようとしましたが、時は明治、長州中心の政府であったため、ついに中途で碑は打ち棄てられました。1878(明治11)年、元新宮藩士の印東玄得が帰新した際、棄てられた碑を見て嘆き、自費をもって13回忌にあたるこの年に石碑を建立しました。(詳しくは『ふるさとの文化を彩った人たち』で)

④峰尾節堂

1907(明治40)年頃、大石誠之助と知り合い社会主義を奉ずるようになり大逆事件に連座し、本山より擯斥(ひんせき)処分(僧侶の身分を剥奪すること)を受け、獄中で病死しました。1996年、本山はその誤りを認め、擯斥(ひんせき)処分を取り消しました。(詳しくは『熊野誌』46号で)

⑤坪井蜂音庵(ぶあん)

漢方医として水野忠央(ただなか)の側近として仕え、忠央が新宮に蟄居したとき江戸から同道、その後新宮で住居しました。長女すむは、明治の漢詩人として有名な中野逍遥の漢詩に描かれています。(詳しくは『燔祭』42号で)

⑥尾崎真龍(しんりゅう)

幕末に活躍した明暗真法尺八の名人として有名な僧。本名は尾崎卯右衛門、1820(文政3)年生まれ、京都で勤皇派として活動中、幕府に捕縛されたこともあります。維新後は新宮で住居、1888年(明治21年)に亡くなっています。(詳しくは『熊野誌』23号で)

⑦湯川麑洞(げいどう)

那智勝浦町浦神出身の麑洞(げいどう)は、若くして大阪の大塩平八郎の塾に入り、師の代講も勤めるほどの高弟になりました。麑洞(げいどう)は、大塩の乱の直前に大阪を出て熊野へ帰りました。その後、江戸の昌平校などで学び水野忠央(ただなか)に仕え、明治維新後は新宮にできた小学校の校長などを勤め、1874(明治7)年に亡くなりました。(詳しくは『ふるさとの文化を彩った人たち』で)

⑧須川政太郎

音楽教師となり、旧制七高の寮歌「北辰斜めに」を作曲、代表作となりました。また、妻のカタは政太郎と結婚する前に竹久夢二と出会い、その経験が後に夢二の代表作「宵待草」(待てど　暮らせど　来ぬひとを)の詩になりました。二人ともここに一緒に葬られています。(詳しくは『ふるさとの文化を彩った人たち』『熊野誌』37号で)

⑨大石誠之助

1911年(明治44)、明治天皇暗殺を謀ったとして、幸徳秋水らとともに大逆罪で死刑となりました(熊野地方では6名が検挙され、内2名が死刑、4名が無期懲役)。しかし、戦後、当時の政府が社会主義を廃絶させるために仕組んだ事件であることが判明、無罪とわかりました。大石誠之助はアメリカ帰りの医師として仲之町(後に船町)に医院を開業、多くの貧しい人々を無料で診察したため「毒取る大石」と神様のように慕われました。現在では、戦争反対・廃娼を唱え、政治などにも積極的に発言した誠之助は熊野地方の人権の先駆者として評価されています。(詳しくは『禄亭大石誠之助』『大石誠之助小伝』『熊野誌』46号)

⑩和貝彦太郎

新宮中学在学中から俳句・短歌で地方文壇のリーダー的存在となり、佐藤春夫や下村悦夫らを指導。その後、上京して平出修弁護士事務所に勤務、大逆事件に遭遇します。平出修は崎久保誓一・高木顕明の弁護にあたることとなり、和貝も公判記録などを筆写しそれを石川啄木が読みました。大逆事件関係者として長い間、理不尽な弾圧を受け、1917(大正6)年に帰新します。1960(昭和35)年の幸徳事件50周年紀南関係者追悼記念行事では、実行委員長を務めました。(詳しくは『熊野誌』46号別冊で)

⑪奥栄一

佐藤春夫と同級生で愁羊と号しました。詩・小説・翻訳などを手がけ、『民衆の芸術』を永田衡吉らと創刊、大杉栄・伊藤野枝らも寄稿しました。その後、新宮へ帰り、1969(昭和44)年に亡くなりました。(詳しくは『ふるさとの文化を彩った人たち』で)

⑫永田衡吉(こうきち)

父は初代新宮市長の角源泉です。大正時代には『民衆の芸術』を大杉栄らとともに創刊、昭和初期には劇作家で活躍します。また1927(昭和2)年、柳田国男らとともに「民俗芸術の会」を創立、戦後は民俗研究を行い、人形芝居などの民俗芸能の分野では日本を代表する学者となりました。(詳しくは『ふるさとの文化を彩った人たち』で)

⑬高木顕明(けんみょう)

浄泉寺の住職で、被差別部落の門徒との出会いなどから大石誠之助らと共に非戦・平和などを唱え活動し、大逆事件に連座しました。事件後、大谷派から擯斥(ひんせき)処分を受けましたが、1996年に処分の取り消しが行われました。(詳しくは『高木顕明』『熊野誌』46号で)

⑭下村悦夫

下村悦夫(本名悦雄1894-1945)は大正・昭和にかけて活躍した時代小説作家。代表作『悲願千人斬』などがあります。歌集に『口笛』『熊野うた』があります。

⑮中上健次

『岬』(1976(昭和51)年、第74回芥川賞受賞作)、『枯木灘』『地の果て 至上の時』の秋幸三部作で路地を中心にした地縁と血縁の私小説的世界を描き、日本を代表する作家となりました。また『千年の愉楽』『奇蹟』では路地に住むオリュウノオバを語り部に、豊穣な物語世界を構築、日本文学の枠を超えたものとなりました。これらの作品はすべて熊野や新宮を舞台にしているため、中上健次は熊野の代表的作家ともいわれています。(詳しくは上記の小説で)

⑯川上不白

江戸千家四代目の墓。新宮に生まれた初代川上不白は、江戸でほとんど知られていなかった千家の茶を広め、江戸千家の流祖となりました。この墓は四代目で、水野忠幹(ただもと)の御側御用人でもあり、幕末に水野忠央(ただなか)といっしょに新宮へ来て、明治初年にこちらで亡くなりました。(詳しくは『熊野新宮から見る茶人川上不白の風景』で)

熊野古道(巡礼道)

近世の熊野古道はイオンの駐車場横の道をのぼり、上の寺(真如寺)の前を通り、そのまま墓地の尾根をまっすぐに広角(ひろつの)へ行く坂道まで行き、左へ曲がり、広角(ひろつの)の一里塚へ続きます。江戸時代、西国巡礼の通り道でした。